

2012年1月27日・しんぶん赤旗「読書」欄では

福島核災棄民——町がメルトダウンしてしまった 若松丈太郎 著

〈核発電〉〈核災〉とよぶ詩人の覚悟

若松さんは、福島県南相馬市原町在住の詩人。南相馬市は原発事故後、警戒区域、計画的避難区域に指定された。前著『福島原発難民 南相馬市・一詩人の警告』は、3・11以前から、繰り返された福島第1原発の事故隠べいを明らかにし、取り返しのつかない大惨事を警告していた。

本著はその続編。「わたしは原発を〈核発電〉、原発事故を〈核災〉とすることにしている。〈核発電〉という表現をもちいて、〈核爆弾〉と〈核発電〉とは同根のものであると意識するためである。」一被爆国でありながら、原爆と原子力発電を別のものとして使用し、経済を発展させた日本。戦後からの途の「過ち」は、福島^{きよ}の現状をみれば明らかであり、欺瞞^{ぎまん}に満ちた安全宣言ののち、人々を避難させず棄民しているこの国の形に身震いがする。

南相馬市だけでも原発事故から1年間の〈核災〉関連死者は266人（桜井勝延南相馬市長談）にのぼり、報道されない理不尽な死を詩人は見つめ続ける。「わたしたちの子孫、十万年後の人類にどんな世界を用意してやらねばならないかについて、考究し、実行する責務を負った」これは、若松さんご自身の覚悟であり、私たちすべてのおとなへの呼びかけである。

〈フクシマ事故後八年／すがりつくような／訴えるような／病気からの救出を期待しての／あのまなざしを向けるのだろうか／二〇一九年フクシマの子どもたちも／わたしたちに対して〉（「子どもたちのまなざし」より。若松さんは、チェルノブイリ事故8年後にその地を訪れた）

私たちには、子どもの未来を変える責任がある。

評者：中村 純（詩人）

と紹介されています。